

## 海で出会う2つの民主主義: より良く安全なアジアのために

Remarks of Shinzo Abe, Former Prime Minister of Japan, at the Indian Council of World Affairs (ICWA) and Japan Institute for National Fundamentals (JINF) joint seminar, 20 September, 2011, New Delhi, India

皆様わたくしどもを、素晴らしい機会にお招きくださりましてまことに有難うございました。そしてわたくしをスピーカーの1人としていただきましたことに、御礼申し上げます。

さてわたくしにとっての友人にあたる皆様、ゲストの方々、そしてご列席の皆様、こうしてニューデリーに戻り、皆様とお話のできますことを、どれほどわたくし、喜んでおりますことか。まずはそのことを申し上げなくてはなりません。この機会を実現なさってくださったすべての皆様、おひとりおひとり、そして日印双方の方々に、感謝の意を捧げるものであります。

お分かりでしょう、日本からやって参りましたわたくしども、自民党がいれば民主党もおりまして、混成部隊であります。今月初めに発足しました新政権のことなどになりますと、まあなんといいいますか、およそコンセンサスはございません。

けれども絶対的な意見の一致もあるのでありまして、それは、こと日印関係になりますと、なににせよ非常に大きなものを追い求められるのだという、その点についてであります。でありますればこそ、わたくしども皆、ここにこうしておりますこと、インドについてより多くを学べますことを喜び、心躍らせている次第です。

わたくしはと申しますと、2007年、当地を去りまして以来、いつか戻ってきたいものだと常々念じて参りました。1度か2度、惜しい機会を逃したのですが、ようやく今度、とうとう戻って参りました。

わたくしには、このことを喜ばなくてはならない理由がございます。

「2つの海の交わり」と題してスピーチをいたしましたのが4年前。そこではいくつか、目標を掲げました。これを追求する責任が自分にはあるという、その思いが絶えず念頭にあったということがひとつであります。

さらに一層喫緊のこととして、わたくしはインドへ戻りたいと、そして日本国民になりかわり、感謝の気持ちをお伝えしなくてはならないと思っておりました。津波ののち、皆様がわたくしどもに差し出してくれた助けに対してであります。

あるときわたくしども夫婦は、ひとつニュースを知りました。インド政府が、日本に援助隊を送るのだ、という、その援助隊にとって、海外派遣は隊始まって以来のことになるのだという、そういう知らせを耳にしたとき、妻昭恵とわたくしは、深く胸を打たれました。

「インドの人たちに、お礼を言わなくてはいけないね」と、わたくしども、そう言い合ったものです。

あれは援助隊が、仕事を終えたときでした。隊長さんが取材に答え「自分たちは被害者を助けたけれど、それと同じくらい、日本人から学ぶところがあった」と言ったのです。「日本人の勇気に、皆忘れがたい印象を受けた」と隊長さんは言うておられた。

そんな言葉を聞くにつけ、わたくしは、再び、心温まるものを感じないではいられませんでした。

わが日本は、筆舌を絶する苦難にありました。そんなとき、皆様方が差し出してくれた助けにいま、改めて御礼を申し上げます。日本が倒れたとき、みなさまがたは共にいてくださいました。すぐ脇に、いてくださったのであります。

しかしながら、次のことも、劣らず大切なこととして申し上げておかななくてはなりません。それといいますのは、わたくしには祝賀をしなくてはならない、それも、皆様と一緒に慶賀をしなくてはならない訳が、2つあるのであります。

第一は、4年前にお約束しましたとおり、いまやわれわれ両国は経済連携協定によって結ばれているのだということです。思えばわずかな時間のあいだ、インドと日本は随分と遠くまで来たものです。どうでしょうこの際、ここでわれわれ、そのことに喜びを表してみようではありませんか。

伺いましたところ、日本のビジネスパーソンが3年の就労ビザをどんどんもらっております。東京と大阪にあるお国の大使館や領事館は、この2年だけで、これを1万通以上出したのだと聞きました。飛躍的な伸びであります。われわれを鼓舞する勢いではあります。けれど、もっと多くを望みましょう。

思いますに、日本人は皆様方の市場と、そしてヒューマン・パワーを必要としております。インド人は、われわれの技術や投資を必要としているわけです。

これはシン首相とわたくしが疑いの余地なく意見を一致させたところではありますが、およそ世界にあるいかなる二国間の関係におきましても、日本とインドの関係ほどに、発展の可能性を秘めた間柄というものは、ありません。

同じように、2人が完璧に意見の一致を見たのは、強いインドこそが日本にとって最善の利益、強い日本は、インドにとって最善の利益だという点でありました。

われわれ両国の経済協力に関する限り、可能性は青天井であります。そのためわれわれは、素晴らしい一歩を踏み出しました。いかがでしょうもう一度、ともに祝おうではありませんか。

もうひとつの点に触れたいと思います。それはこの4年というもの、コミュニティづくりという側面において、インドと日本は長足の進歩を遂げたということについてであります。

わたくしには、わたくしなりの原則があります。アジアでコミュニティをつくらうとする営みにおいて、全体を引っ張るのは海洋民主主義国であるべきだという、それがわたくしのプリンシプルです。

なんとなれば、海においてこそ、アジアは互いに結び合っているからであります。そしてまたアジアとは、清新で、伸び続ける民主主義諸国の別称でもあるからです。

だからこそインドは世界最大の民主主義、日本はアジア最古の民主主義として、常に、またともに、手を携えて主導的役割を演ずべき義務を負うのだといえましょう。4年前、セントラルホールでいたしました演説の題名に、わたくしはそんな意味を込めたつもりでありました。

でありますからこそ、今では米国も正式に加わりました結果として、東アジアサミットがますます重要性を帯びているというそのことを、わたくしどもインドと日本、ともに祝わなくてはならないと存じます。自由で、オープンで、安全でかつ強いアジアのコミュニティ。そこへ向け

東アジアサミットが大事な存在になっているという、そのことを、であります。

アジアとは実に、世界において最もダイナミックな地域であります。ベトナムは成長著しく、インドネシアは民主主義へと大きく踏み出しました。しかしながら皆様、日本は今も、そしてこれからも、強くて活気に満ち、正直で真率な、したがって皆さん方にいかなるときも頼りにしていただける国であり続けます。

そこでわたくしから皆様へ、本日お願いをする第一の点とは、もっと緊密に、一緒に働こうではありませんか、ということです。米国、オーストラリア、そして他の海洋民主主義諸国とともに、堅牢にして開かれた、自由にして安全であり、また安定をした EAS とそのもとのアジアに向け、ともに力を込めていこうではありませんか。

どうか、ご記憶願いたいと存じます。日本とインドくらい、おのずからなる同盟をなし得る組み合わせはありません。それはひとつには、わたくしたちの間には引き合う親愛感があるからであります。

親愛の感情は、インドの偉大な詩人にして哲学者タゴールが生きていた時代まで遡ります。皆様方、今年は再びタゴールのことを思い出しておいでです。きっとそうだったのかと思っただけのことでしょう。わたくしの国で、日本語に訳されたタゴール詩集はおよそ絶版になったことがありません。

インドと日本とがおのずからなる同盟をなすということ、戦略的に眺めてみます。すると両国には、いくつもの共通点があることに気づきます。

例えば極めて重要なこととして、インド、日本の両国とも、海上交通路・シーレーンをひと

つの公共財とし、これを決定的に大切なものだと考えております。

この公共財を責任もって守るにふさわしい政治体制とは、いかなるものでしょうか。それは、開かれた民主主義以外であってはならないのであります。インドと日本はともに、自由を愛する国々です。どちらも、いわば年季の入った民主主義国です。そしていずれの国も、自分たちのネイビーに誇りを抱いております。

再び申し上げていいでしょうか。おのずからなる同盟として、インドと日本は、わたくしどもにとって大きな意味をもつ海洋アセット(公共財)をオープンで自由、かつ安全なものとして保ち続けていくため、なお一層汗をかかねばならないと思うものであります。

そこで、わたくしが申し上げたい本日第二のお願いとなります。

どうか皆様、インドの海軍に、わが国の部隊と洋上でより頻繁に遭遇させるということを目指して、仕向けてください。

わが国民主党のポピュリスト政府は、それまでインド洋で続いていた海上自衛隊による給油活動から足を洗ってしまいました。けれども幸いなことに、わたくしどもの誇るべきネイビーは、今なおソマリア沖で海賊防止活動に従事しております。

いかがでしょう、この際、お互いにクリエイティブになりたいものであります。

そんなわけで、海上自衛隊の艦船は、任地へ向かう途上か、あるいはまた帰国の途上に、インド洋を通過いたします。その都度、インド海軍艦船を送ってみる。そしてごく簡単な訓練をやらせてご覧になるという、そういう方法もあります。

両国ネイビーは、旗の信号を交わし合うことができますし、昔ながらの発光信号を使って会話をすることもできます。陣形を整えて走らせるといったことですら、よい訓練になるでしょう。そもそもこれはわたくしどもにとってさほどの出費を伴いません。皆様方にとっても同様でありましょう。

アメリカ人たちは、わたくしたちがささやかな訓練をしているところを観察しているかもしれませんが、これは日米印、いずれにとっても構いません。もしかすると中国人も、何かを飛ばして見に来るかもしれませんが、これまた大いに歓迎であります。

いまわたくしの国は、ジブチに小さな基地を構えております。ささやかな存在ではありますが、日本が外国に構えた基地として、これは戦後で初めてのものとなります。

わたくしには確信があるのですが、もしインドがインド海軍のオフィサーたちをここに送ってくださったなら、基地に働く者たちすべて、喜びとすることでしょう。送られてきたのがもしもボリウツのゴージャスなスターたちだったら…。これは、もっと歓迎されます。

わたくしどもはというと、日本のネイビーももっと創造的になり得ると思います。

例えばの話、わがネイビー士官たちの中で、皆様方がアンダマン・ニコバルにもっておいでの統合基地を訪問したことがある者など、ほとんどおりません。それを言うなら、アンダマンとニコバルがインドに属することを大方の者が知っているかどうか。怪しいところです。

さはさりながら、日本の艦船は、これらの島々をちよくちよく訪れるということがやろうと思えばいたせます。

このような場合、と言いますのは洋上での訓練ですとか、皆様方のジブチ訪問ですとか、わたくしどものアンダマン・ニコバル往訪ですとかの場合、もちろん写真やビデオを撮らなくてはなりません。そしてそれを世界に向けて公開しなくては、と思います。

なぜといいますに、盟友たるもの、こうしたことを何ら恥じるべきでないからであります。またアライアンスのマネジメントにとりまして、パブリシティは大切なものだからであります。

以上を踏まえ、以下はインドの友人として、申し上げてもよろしいでしょうか。

皆様方は、大洋海軍を、それも空母とその戦闘群を3セットも有する海軍を持つようとしておいでです。

インドは、何しろ最大の民主主義国であります。インド洋を安全に保ち、われわれのシーレーンを安定したものとするうえで、地域の中では皆様方くらい、海軍力をフルに使うにふさわしい国はないものと存じます。

皆様方こそは、日本人を、韓国人、ベトナム人、インドネシア人を、そして中国人はだめでもオーストラリア人とアメリカ人を、安心させることができます。もしも皆様方が海軍力を使うのだ、と。「2つの海の交わり」のため、そこで自由と繁栄のため使うのだと決められたならば、ということでありませぬ。

これを申しているのはほかでもありません。米国が、いまや財政的な緊張の時期へと突入している現実があるからであります。

アメリカと言いますと、皆様には複雑な思いがおありでしょう。それは、われわれ日本人とて同様です。

皆様方は議会において、毎年毎年、広島と長崎の犠牲者に対し黙祷を捧げるということ

をしてきてくださいました。一度として欠かさずおやりになってきてくださった。これには、わたくしとして衷心よりの感謝を申し上げるものです。

けれども他方におきまして、海上交通路の安全と安定というものは、いくつも海をまたがり、米国が支えてきたものであります。これがありました。ゆえに、1950年代の日本に始まり、1980年代には韓国と台湾、そして過去20年余りは中国とインドとが、戦時の荒廃や貧困から抜け出すことができたのであります。

欧州とは、この点事情が異なります。世に「覇権安定性理論」なるものがありますが、これはインド・太平洋地域においてこそ、あますところなく該当したものであります。

ところがそのヘゲモンが、わたくしの案じるところ、だんだんと痩せ、筋肉も落ちていきかねません。

そこでこう、言ってみようかと思えます。この際は「ポパイ」に、しばらくほうれん草を食べてもらいましょう。その間は、アメリカ人と一緒にではあります。インドと日本とが頑張っ、戦略的な空白などが生じることのないよう共同して働こうではありませんか、ということでありませう。

しかもその際いつも念頭に置いておきたいのは、インドと日本が手に手をと、肩を並べて働くならば、そこに例えばインドネシアが加わってくることでしょう。言うまでもなく、自由を愛する国々のすべてが加わってくるであろうということです。

インドと日本、両国のネイビーがもっと一緒に働くことが喫緊の課題となるゆえんはここにあります。

次の論点へいまから移って参りますが、その前に、いままで米国との二国間海軍演習を続

けてこられたインド海軍の皆様、わたくしからの敬意を捧げたいと存じます。年を経るに連れ、蓄積は双方において大いに信頼を培ってきたものと思えます。

今年、日本のネイビーは、地震の後のことでしたから、米印海軍演習に加われませんでした。残念なことではありましたが、皆様方としても、日米印のそうした訓練をもっと見たいと思っておいでであろうと信じるものです。

ご列席の皆様、

わたくしはこのスピーチを、祖父岸信介に触れないでは終えることができません。岸は戦後初めてお国に公式訪問をした日本の総理大臣でありました。

まだ子供だった頃、祖父の膝に座りながら、わたくしは祖父の話を聞いたものでした。ネルー首相に引き出されて見た聴衆は10万人に、なんなんとするもので、それまで祖父が見た中でいちばん大きな数の聴衆だった、などと申しておりました。

日本は国際社会の誇りある一員としてODAを出そうとしていたが、インドは他のどの国よりも先に、受け取ろうと名乗りを挙げてくれたのだとも言い、これらのことに、祖父は終生感謝の気持ちを抱き続けておりました。

祖父は若い時分、満州をよく治まった工業国家として育てていくことを夢見た人間です。戦時下内閣の閣僚として、戦後は米占領当局の手で逮捕もされました。

祖父のアメリカに対する思いたるや、さぞかし複雑なものであり、恐らくは他の誰より、その点の思いに深いものがあつた人でありました。

しかしながら、まだようやく成長を始めたばかり、貧しい国を率いるリーダーであります。物事を現実的に捉えなくてはならないのだということを、祖父は知っておりました。でありますればこそ、日本にとって一にも二にも大切な国とは米国だということも、祖父はおよそ一片の疑いもなく、理解していたのであります。

その米国と、よい関係を築かなくてはなりませんし、日米安全保障条約を改定し、日本をより安全な場所としなくてはなりません。けれどもそのために、すぐワシントンへ行くということをしませんでしたし、何かをひたすら乞うなどということはしませんでした。

そのような態度は、岸の遺伝子になかったのだと思います。そこで岸が選んだこととは、米国の地に足を踏み入れるより前、インドへ先にやってくるということでありまして、それは一体なぜだったのでしょうか。

現実主義の政治家として、インドへ来れば政治的基盤を強くできると知っていたのであります。実際、インドにおいて祖父は多くを獲得しました。

後に祖父はワシントンでアイゼンハワー、ニクソンの正副大統領との面会に臨みますが、そのおり、日本は決して孤立しているのではなくインドという当時既に世界最大の民主主義国の支援を得ているのだと知っておりましたから、自信をもって振る舞うことができたのであります。

ご列席の皆様、

中国とはわれわれにとって、向こう当分の間、チャンスであり、またリスクでもあるという、そういう国であり続けることだろうと思います。

一方アメリカは、相対的にはありますが、弱くなっていかざるを得ない。

しかし、であります。わたくしども、ここは間違っているところではないでしょうか。乗り遅れるなどばかり、間違ったバスに乗り、組んではならない相手と組むといったようなことは、しないよう心がけねばならないのだと存じます。

アメリカにおいてわたくしたちが見るものは、世界最古の民主主義であります。中国において見るものとは、世界最古にして、今なお形成途上でありますから世界最新でもあるという、一つの専制であります。

だといえますと、われわれ日本とインドがどちらにつくべきか。疑いの余地はないのだと思うものです。

しかも米国は、財政面で危機にあるいま、われわれアジア人がアメリカを必要とするのと同様に、われわれを必要としております。

そこでここからが、わたくしが浅学を顧みず申し上げようとしております 3つめの、そして最後のお願いになります。

皆様方は、誇りある国民です。と同時に、リアルな物の見方をなさる人々でもいらっしゃる。経済建設において皆様がおいででの到達点は、わたくしの祖父が総理をしていた頃の日本がいた位置に比べますと、既に遠くまで来ておられます。

皆様方の中にある、アメリカに対する違和感を、皆様方は一度柵の奥にしまうことがおできになります。そして、皆様方のうちなるリアリスト・プラグマティストを、前面に出すということがおできになるのであります。それに第一、アメリカはインドに、1発も爆弾を落としてはいないわけでありますから。

それでは、もし皆様がその気におなりになったとして、いちばん良い方法とは何でしょうか。

それはわたくしどもをお使いくださることです。日本をお使いくださることです。皆様方がアメリカとの紐帯を太くするためご希望とあれば、わたくしどもにはいつでもそのお役にたつ準備と、心構えができております。

思いますに、日本は米国と60年間、途切れることのない同盟関係を保って参りました。米国史全体に対し4分の1以上になんなんとする期間、日本は米国の同盟であったわけでありませぬ。

その間日米関係には、良い時があり、悪い時がありました。けれども同盟はいくつも荒天を乗り越え、最近では、津波を経て一層の強化をみました。

わたくしはこれまで、3つの要請を申し上げて参りました。インドと日本、さらに一層力を尽くし、EASを盛り立てて、開かれてリベラルな、自由で活力あるアジア・コミュニティーをとともに作っていくにはありませんかというのの一つ。

皆様方には、海軍力の上手な使い方をお考えいただきたい。ゆくゆくはそう遠からぬうち、日本、インド双方のネイビーが相互に纏り合されるくらいになったらいいだろうというのが、二つ目でした。

最後に三番目として、皆様にとっての友人である日本をしっかり使っていただきたいと申しました。インドにとって戦略的ポジションを拡大していくため、もっと言うと、アメリカとの絆をより深めていくために、ということでもあります。

お国を最後に訪問しましてからもう4年経ちます。インドはいまもって、驚嘆すべきテンポで成長を続けているように見受けられます。

で耳に入ってくる活気あふれる物音など、人を勇気づける効果があるものです。

一個の民主主義国として、皆様方の実験が気高いものでありますのは、経済成長を続けながら、社会の安定を保とうとなさっておられることで、これは途上国にとって輝ける先例となるものです。

もしもそうしたやり方が「デリー・コンセンサス」と呼ばれるものでしたら、わたくしには喜んで、そのセールスマンになるつもりがあります。

皆様方の成長の追求それ自体には、なんら引け目を覚える必要のあることなど、ありません。どうぞ、成長し、成長し続けていってください。そのことで、わたくしどもすべて、益するところ大であらうと存じます。

まことに、強いインドこそが日本最善の利益、強い日本はまた、インドにとって最善の利益であります。

インドへ戻って皆様方とこうしてお会いできまして、わたくしはどれほど喜んでおられるかということをもう一度、言わせてください。皆様方、本当にありがとうございました。

了